



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticano の転載許可済
© 1991
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

生命・死・環境

(人間生命に関する国際会議で)

ここ数日、審議を重ねている各議題は、生命に対する基本的人権とその性質に関するものです。人間の受胎から終焉までを、自然環境の中でとらえる、ということなのです。環境は常に、人格の十全な表出に、より一層適応しなければなりません。人格は、その人だけでなく、対人関係、社会関係によって発達する面もあるのです。

人間の生命は環境や自然界と密接に関わりますが、後者は生命の必要に、基本的な必要にさえ、常に十分に適合するとは限らないのです。それどころか、否定できない事実が科学と技術の進歩が多くの分野の改善に役立つ一方、回復不能ともいえる環境の劣化の原因となったり、著しい退化をもたらすこともあるのです。環境の均衡を再発見するには、人類の自然支配についての本当の理解に戻るほかありません。私の最初の

回勅で思い出したように、「創造主自身が任務として人間に指定した見える世界に対する人間の支配とは、倫理が技術に、人格が物に、精神が物質にまざっているということのほかに実際に何を意味しますか。」(『人間の贖い主』16番)

ですから、生態学の問題は自然と人間性に関するものであり、環境を適切に守るためには、同時に「精神の生態学」を促進することも含まれます。このように視野を広げてこそ、人間の生活に役立つ環境の均衡の再建のために計画される全てのことが希望のレベルまで十分に達成されます。科学会議や討議で重要なのは、技術的進歩の目標は文明の進歩に、つまり人格と尊厳にもっと良く調和する生活にあるという信念に、明確に動機づけられることです。そうでなければ、却って人格に敵対する関係となります。

まさにこの文脈によって、生命の始まりからの尊厳と権利、尊厳の権利という議題が現れ、大会に参加している皆さんも、このことについて審議しておられるのです。

教会が神の委託により、胎児の完全無欠、不可侵の権利を堅く弁護し宣言して止まないのは、生命そのものについての考えに根拠を置く要求に応じるものです。「人間の生命は聖です。生命はその始まりから『神の創造の業』を包含しており、生命の唯一の目的である創造主との特別な関係は永遠に存続するものだからです。神のみが生命の主であり、生命の始めから終わりまでそうであり、何人も、いかなる状況にあっても、無実の人間に直接手を下す権利を主張することはできません。」(教理省人間の生命の原始における尊厳、及び生殖の尊厳についての教書 5番)

教会は死に瀕している人、特に末期の生命に対しても同様の尊厳を要求します。生命の称揚は、死の直前および死に臨む時以外ありません。自然な終極を迎えつつある場合も生命は十分に尊重され、保護され、援助されなければなりません。病人は

たとえ科学では不治と宣告されているようにとも、決して療養(治療)不能と考えてはなりません。

末期症状に対する態度は、私たちの正義と愛徳の感度や魂の高貴さのテストであり、医師や医療従事者の責任感や専門技能のテストとなります。苦しみの重荷に耐えている人たちのための断固たる助けになることもよくありますし、病床の周りで苦痛を軽減しようと努める人たちに与っても、人生についての最大の教訓となるものです。

この大会のテーマとして選ばれた死の尊厳の問題があります。実際、人間に共通なこの神秘的出来事に、人生の意味が結実していきます。シラの書に「死ぬまではその人のこと

キリスト教的

聖性について

を幸せだというな、人の正体がわかるのは最期の時なのだ(11・28)とあります。キリスト者ほどの普遍的な状況の意味を十分に理解できる者はいないでしょう。キリストの贖罪的死の内に自分の死を理解し、自分の全生涯を改善することの価値を理解する鍵を握っています。キリストの死は、各々の人間の死に新しい聖性を付与し、安楽死の手法で死の到来を勝手に早めることを禁じる理由ともなります。

安楽死についての教会の考えはご承知でしょう。人間の生命の無限の豊かさや超越的終極性とを認める科学であれば、教会の教えを受け入れることができるはずですが。(教理省『安楽死についての宣言』参照)

天の父が完全であるようにあなたたちも完全な者になれ。(マテオ5・48)

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。山上の説教はイエズスの弟子にとって真の(完徳に達するためのルール)ですが、特に冒頭の言葉はその頂点であり、最も雄弁で挑戦的な教えです。この言葉の意味すること、人生に対するその意味とは何でしょうか。

新約の掟に従って生きようとする人にイエズスが求められるのは、人間が考えや行いに現そうとしている完徳の基礎と模範を天の御父の聖性の上に置くように、ということですが、イエズス・キリスト、「主のみ聖なる

る、聖なる霊が共にいます方、彼こそ神の聖性の十全な啓示そのものです。彼の言葉と行いは、あらゆる完徳の師であり模範、源泉であり尺度です。ご自分の死と復活の後、天に昇り、御父の右に座し、イエズスを信じてその教会を形作る全ての人に聖霊を注ぎ、今もなお注いでおられます。聖霊によって人々はイエズスの下に「一」となり、多くの恵みに富み、全身全霊をあげて神を愛し、互いに兄弟姉妹として愛します。一言でいえば、イエズスは人々を「聖なる」者となさるのです。

とりわけ聖性は一つの賜であり、

私たちがキリストにより、聖霊との交わりの中で、神の生命にあずかるものとしてくださいます。こうして私たちは、神の聖所であり、神の霊がその中に住まわれるキリスト（コリント①3・16参照）であるぶどうの木の花となり、これは無にしておけない賜であり、私たちが喜びにあふれて生き、聖体の祭儀にあずかるべきように感謝をもって主を讃えなければなりません。

しかしキリスト教的聖性は、賜であるばかりでなく、キリストの弟子たる者にとっては日常生活で実現すべき課題であり、具体的に応えるべき召し出しでもあります。この召し出しは全ての人に例外なく呼び掛けられるものです。けれども、その形は様々であり、ある人たちには神と兄弟姉妹に仕えるためにより大きな献身が求められます。

第二バテイカン公会議は『教会憲章』でこの事柄について、大層美しく鼓舞させるような文節で次のように言っています。「教会の中において、全ての人はみな聖へと召されている。それは使徒が『神の御旨、それはあなたがたの聖となることである』（テサロニケ①4・3、エフェゾ1・4参照）と言っているとおりのある。教会のこの聖性は、霊が信者の中に実らせる恩寵の果実となつて絶えず明示されている。（39番）

恩寵の果実の中でも、兄弟的愛徳の働きは、今聞いた福音の主張であり、特に注意を呼び起したい所です。愛徳の行いの基礎となる拠り所は、神の人間に対する愛とその完全な実現であるイエズスの教えと生き

方にあります。キリスト者が自分の神的な先生から教わるその愛は、普遍的な愛です。血縁者や同じ信仰に生きる者に限られるのではなく、全てのの人に、悪人や罪人、異邦人、敵にさえも開かれています。この愛は恩寵に依る人のみに限られず、恩寵を受けても感謝せず、報いもしない人々にも向けられます。この愛は拡がって、赦すという「逆説」にまで至るのです。

こうしてイエズスは、私たちが神の国の説教の真髄にまで導いてくだ

さいます。無限の憐れみ、すなわち全ての人に陽と雨とを与え、赦すことを教え、永遠の生命へと召される御方、その御方に愛されていると感じ、実際に愛されている人々は、神の溢れる優しさを他の人々に注ぎ込まずにはいられません。その人自身が、最初に、神の優しさに無償で包まれ、圧倒されたのですから。

キリスト教的聖性の独特さは、実に「愛徳の完成」にあります。信者の召命は神の愛を宣言し、神の愛の証人となることです。それによって

全ての人がその美しさを発見し、自らの生活でそれを体験するようになるでしょう。

もつと堅固な
靈的生活をめざして

この目標に到達するためには、信仰や祈りについての旧来のガイドを個人レベルや共同体レベルで再提議しなければなりません。また、現代の信者の状況や必要にふさわしい新しいガイドも作成しなければなりません。もつと堅固な靈的生活へ、倫

理的道徳的意義とより一層しっかり噛み合った靈的生活へと指向するよう、注意と実践に目覚めさせるものでなければなりません。再発見すべき内的な諸徳や態度は、現代の世俗化した社会では忘れ去られたもののようなですが、ある種の郷愁も合わせ持っており、キリスト者と称する人々の行為に示されるのを見た」と求められるのも当然なことです。たとえば非暴力、連帯、「いと小さき者」との分かち合い、敵にも及ぶ全ての人に対する赦し、など。

内的生活の源 — 聖霊の賜

「聖霊」シリーズ ⑤

1 前回考察したように、パウロは「キリスト・イエズスにおいて命を与える霊の法」（ローマ8・2）について教えています。「霊によって生きる」（ガラツィア5・25）ことを望むなら「肉」の行いではなく霊のわざを実現させるために霊の法に従わなければなりません。

パウロは「肉」と「霊」の対立、そしてそれぞれから生じる相反する行い、思い、生活を強調しています。「肉に従って生きる人は肉のことを念い、霊に従う人は霊のことを念う。肉の念いは死であり、霊の念いは命と平和である。（ローマ8・5〜6）

「肉の行い」や「動物的人間」がもたらす精神と文化の退廃を目にするのはとても悲しいことです。しか

し、全く異なる生き方、「霊に従う」生命（生き方）が実際にあることを忘れてはなりません。それは実際にこの世に在り、悪の権力の広がりに対抗しています。パウロはガラツィア人への手紙で「神の国」から人を締め出す「肉の行い」に對比させて「愛、喜び、平和、寛容、仁慈、善良、誠実、柔和、節制」である「霊の実」があることを述べ（5・19、22参照）、自分の内なる法、すなわち内的生活を導く「霊の法」のもとでこれらの実が結びと教えています。（5・18、25参照）

2 イエズスの弟子たちへの言葉から分かるように、超越的である霊的生命（生活）と、キリスト信者としての行いの根源が問題とな

「それは真理の霊であり、世はそれを見もせず知りもしないので、それを受け入れない。（…）しかし、（…）あなたたちの中にいます。（ヨハネ14・17） 聖霊は高きより来られ、私たちの内的生活に生命を与えるために、私たちの内に入り住まわれます。「霊はあなたたちと共に住んでいる」、近くにられるばかりか、私たちの内に住んでおられる、とイエズスは仰せになります。（同14・17） 御父が「霊によってあなたたちの内の人を力強く固めてくださる」（エフェゾ3・16）ことをパウロはエフェゾ人への手紙で願いました。人間にとって価値あるのは外的、表面的な命を生きることではなく、すべてを見通す聖霊によって示される「神の深み」のなかに住むことなのです。（コリント①2・10）

パウロが示す「動物的な」人間と「霊的な」人間（同2・13、14参照）の区別を考えれば、靈魂の能力の自然な成長と、靈的生命の広がりに伴うキリスト信者としての成長、つま

3 イエズスは「ヤコブの泉」の傍らで、信じる者に与えられる生きる水についてサマリヤの女に話されました。「その人の中で、永遠の命にわき出る水の泉となる」（ヨハネ4・14）は、靈的生命の源泉なのです。「ユダヤ人の幕屋祭」（同7・2参照）の日にイエズス御自身がこれを明らかにされました。イエズスは「立ち上がって大声で、『渴ぐ人があれば私のもとに来て飲むがよい、私を信じる者は、聖書の言葉にあるとおり（イザヤ55・1参

「鍛」きたえぬ

ホセマリア・エスクリバー著
新田壮一郎訳
定価一六〇〇円 千二〇〇円

「道」新改訂版

ホセマリア・エスクリバー著
精道教育促進協会スタッフ訳
定価一三三六円

説教・講話・書簡等の抄訳

照) 生きる水の川がその内から流れ出るだろう」と言われた。「イエズスは自分を信じる人々が受けるはずの霊について話されたわけである。」(ヨハネ7・37・39)

聖霊は信じる人の内で、新たな命を与える恩寵と、その恩寵の力を善の裏りに変える徳のダイナミックな働きを発展させられます。「その方は聖霊と火によってあなたたちに洗礼を授けられる」(マテオ3・11)と洗礼者ヨハネが洗礼について語っているように、また、「私は地上に火をつけに来た」(ルカ12・49)とイエズス御自身が救い主としての使命について語っておられるように、信じる者の「内」から聖霊は火のように働かれます。パウロがローマ人への手紙の中で、「熱い心を持って」(12・11)と勧めているその熱情で、聖霊は命を燃え上がらせられるのです。それは、清らかにし、明るくし、燃え立たせ、生き生きとさせる「生きる愛の炎」であると、十字架の聖ヨハネは巧みに説明しています。

4 信じる者の内で聖霊が働き、もともとの聖性がすばらしく發展しますから、人格が磨かれ、高められ、破壊されることなく完成に向けられます。どの聖人にもそれぞれ特徴がありました。パウロが「この星とあなたたちの星の輝きは違う」(コリント①⑤・41)と言うように、「死者の復活」の時だけでなく、この世においても動物的でなく霊的な人の状態も星の輝きのように、みな違っているのです。(同15・44参照)

聖性は愛の完成にあります。しかし、さまざまな条件のもとで個々の

人間の示す様相によって聖性は異なります。聖霊の働きのもとで、一人ひとりが利己主義への傾きを愛で克服し、それぞれに固有な仕方でも自己を奉獻し、その中で最良の力を育みます。特に、その固有性が強くなる

と、聖霊がその人たちの周囲に、弟子たちとそれに従う人たち(隠れたままであつても)のグループをお作りになります。このようにして、霊的生命の潮流、霊性の諸派、修道会が生まれました。神のお働きによって様々なかたちで生まれました。人々とそのグループ、共同体と諸派、司祭と信徒のあらゆる能力を聖霊はお使いになります。

5 「主の霊のあるところには自由がある」(コリント②③・17)とパウロが言っているとおり、キリスト信者の生活を特徴づける自由の新しい価値は、内なる源から発します。聖パウロは直接には、キリストの教えと業に一致してキリストに従う人々が、ユダヤの律法に関して手に入れることができる自由と言及しています。その論点は一般的な価値を持っています。パウロはしばしばキリスト者の召し出しとしての自由について語っています。「兄弟たちよ、あなたたちは自由のために召された」(ガラツィア5・13)、「霊によって歩む」(同5・16)人は、肉のくびきのもとにはいず、自由をまわっている。「霊によって歩め。そうすれば肉の欲を遂げさせることはない」(同5・16)。「肉の念いは死であり、霊の念いは命と平和である」(ローマ8・6)

まに従う行いであり、神の国へ入るのを妨げます。キリストを信じる者が霊に忠実に従えば「肉の行い」から解放されるでしょう。聖霊の働きは愛の業です。「これらのことに反対する律法はない」(ガラツィア5・23)のです。

使徒聖パウロは「もしあなたたちが霊に導かれているのなら、律法の下にはいない」(同5・18)と言ひ、ティモテオにも明白に語っています。「律法は義人のためにもうけられたのではない」(ティモテオ①①・9)と。そして聖トマス・アクィナスもこう説明しています。「律法は悪人に対する強制力を持つが、正義の人に対してはそのような力を持たぬ」。

マリアの喜びに満ちた「なれかし」は、彼女の自由な心ころ、信頼と落ち着きを示すものです。(69)

マリアのように、神に対して完全に開いた心を保ち続けてください。マリアにならない、絶えずそばに神秘的に現存される神に目を注いでください。近くにおいて、あなたを導く神、傍らにお通りになるキリストに、思いを馳せてください。

「おことばの通りになりますように」。こう言えるようになつて欲しい。しかも、マリアのように完全に、条件をつけず、決定的に、おそれることなく、たとえ辛くとも、キリスト信者の従順の心をこめて言ってください。(69)

「神学大全」I, II, q. 96, a. 5 ad 1) 義人は律法に反しません。むしろ彼らは聖霊に導かれ、自由に、律法が命じることが全て果します。(ローマ8・4、ガラツィア5・13、16参照)

6 これは自由と律法の調和であり、義人における聖霊の働きの裏りです。エレミアとエゼキエルは、新しい契約の律法が内的なものであることを預言しています。(エレミア31・31、34、エゼキエル36・26、27参照)

「私はおまえたちのうちに霊を置く」(エゼキエル36・27) エゼキエルのこの預言は実現し、今なお、信者と教会共同体の中で生き続けています。律法の単なる遵守者でなく、

マリアの沈黙こそ、御言葉の発生源です。マリアは全てを心に留め、それが熟すのを待つ。お告げの時も同じで神の言葉に耳を傾けているかと思うと極めて自然に對話を始める。神との話し合ひでは私たちが話しかけることができ、神は私たちの言葉に耳を傾けてくださる。(70)

自由、熱心に、忠実に神の計画を遂行する者になることを可能にするのは聖霊にほかなりません。「神の霊によって導かれている人はすべて神の子らである。あなたたちは再び恐れに陥るために奴隷の霊を受けたのではなく、養子としての霊を受けた。これによって私たちは『アッパ父よ』と叫ぶ」(ローマ8・14、15)これが子としての自由です。イエズスはこれを真の自由であると宣言されました。(ヨハネ8・36参照)これが基本的・内的自由です。一つの霊によって私たちが御父に近づかせる愛。これに向かう自由であり(エフエゾ2・18)、諸聖人の命の中で光り輝く導かれた自由なのです。(4・19)

主の遺言に忠実な聖母は、困っている時や困難に直面しているとき、いつも私たちのかたわらにおられ、深い愛に動かされて力強いとりなしをしてくださいます。(62)

ローザリオは、キリストの救いの使命に協力するマリアについての祈りであり、御子への最高の取り次手としてのマリアへの祈りですが、それだけでなく、さらに、聖霊を受けるために聖母と一緒に高間で祈っていた使徒のように、特にマリアと一緒に唱える祈りです。(65)

おとめマリアよ、信仰の旅を続ける私たちに力を与え、永遠の救いの恩寵を手に入れてください。寛容、仁慈、甘美なる神の御母にして私たちの母マリア。(68)

「教会の母」

*番号は『教皇様の聲』掲載号

ある聖母マリア、御父のいつくしみをキリストにおいて祈り求めるマリアに向かって辛抱よく訴える祈りです。(68)

ローザリオは贖罪的な受肉の神秘を中心とした祈りですから、きわめてキリスト論的な祈りです。(68)

「拓」(ひらく)

ホセマリア・エスクリバー著
新田壮一郎訳

定価一六四八円

不変の教え

三位一体の神の働きと人間の

働きと人間

(一) この特別な聖体の集いに、コリント人への手紙を用いて挨拶を送ります。「主イエズス・キリストの恩寵、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともにあるように。」(コリント②13・13参照)

これはすばらしい挨拶で、計り知れない三位一体の秘義を見せてくれます。言葉で言い表わせないことに変わりありませんが、三位一体は神の生命そのものとして、世界の中、歴史の中に現存され、実際に働いておられます。事実、「私たちは神の中に生き、動き、存在するものです。」(使行17・28) 私たちは、教会が唱える栄唱「父と子と聖霊の御名によりて」を繰り返すことにより、同じ事を宣言します。それは神御自身、自らの神性のうちにおられる神、「かつて在り、今も在り、後に来られるお方」(黙示録4・8)です。

神は、全ての時と場所、全被造物を超越して自らの内に存在される方で、人間やその他の知性にも理解できない存在です。「私は(在するもの)である。」(脱出の書3・14)

しかし同時に、神は再臨するお方です。全ての被造物は神の存在を宣言するばかりでなく、その再臨を待っています。

神はどのように来られるのでしょうか。キリスト自身が二

コデモとの会話の中で次のように答えておられます。神は愛であるから来られる、愛と共に来られる。「神は御独り子を与えたもうほどこの世を愛された。」(ヨハネ3・1〜12参照)

従って、神は御独り子において、この世に来られます。その神・独り子とは存在において神と一体であり、教会が絶えず御父、聖霊と同じように賛美する方です。

御子の降臨によって、神は創造のみわざで示された最初の愛を確認なさいます。これが「世を愛された」神なのです。神は世を愛されたので世を創造されました。同時に神は創造によって示された愛をその極み、つまり決定的な頂点であるイエズス・キリストにおいても示されたのです。

たしかに、神の働きのいずれを取り上げても、自らを与える以上に神の愛を明らかにするものではありません。神は御子において自らをお与えになりました。御父は御子をお与えになったのです。御子において御自らをお与えになるのです。

聖体はこの愛の賜の秘跡です。秘跡とは、目に見えるものを通して、御子における御父の愛を意味し、表すだけでなく、本当に実現させる、つまり与えるものです。

聖体では何が実現しているのでしょうか。それは「御子の

派遣」です。救いのために御子が遣わされます。「神がみ子を世に送られたのは、(罪によって)世をさばくためではなく、(罪から)世を救うためである。」(ヨハネ3・17)

救いは愛の裏りです。神の御子は救いの業を完成するために人間となり、地上での生活中、福音を告げ知らせ、全ての人に、とりわけ貧しい人や苦しむ人に善を施されました。さらにキリストは、御父から委ねられた救いの業を十字架の上で贖いの犠牲として自らを捧げることによって完成されました。この犠牲は計り知ることのできないものです。御子は十字架の死にいたるまで自らを捧げ、従われました。「それは、彼を信じる人々がみな滅びることなく永遠の命を受けるためである。」(ヨハネ3・16)

苦しむ人々はキリストの証人である

この犠牲の(値打ちを計る)尺度となるのは父なる神の愛であり、主イエズス・キリストの恩寵(贖いの愛)であり、自らを与える聖霊です。聖体は、犠牲と交わりの秘跡です。犠牲としての聖体祭儀に与る人は、交わりとしての秘跡(聖体)を拝領します。同時に、キリストが受難によって得てくださった聖霊において、神御自身を受け取ります。「私はあなたたちを孤児にしてはおかない。」(ヨハネ14・18) 「だが、弁護者、すなわち父が私の名によって送られたもう聖霊は、全てを教えてくださるだろう。」(ヨハネ14・26参照) 「その方は私について、すべてを教え、あなた

たちの心に私の話したことをみな思ひ出させてくださるだろう。」(ヨハネ14・26〜27参照)

病院生活を余儀なくされている皆さん、苦しみ、責められ、ゴルゴタで十字架に付けられ、苦悶するキリストの証人となってください。皆さんは、この世の罪のために「御自身をお与えられた」ガラツィア1・4) 御子の証人です。聖霊は皆さんと一緒に、皆さんのうちに、皆さんを通して証明してください。これは特別な証言です。聖パウロ

神は「世を愛された」がゆえに世を創造し、さらに御子において、自らをお与えになりました。聖体の秘跡はこの神の愛を示すのみならず、聖霊の働きによって、御子における御父の愛を私たちの内に実現し、私たちを神の民として一つに結んでくれます。

病に伏す人々は、自らの苦しみによって神の民に欠けているものを補い、完成させることができるのです。

はその役目が自分にも与えられたと書いています。「私の体をもってキリストの苦しみの欠けたところを満たそうとする。」(コロサイ1・24参照)

全教会はこの証言を受け入れ、皆さん一人ひとりに感謝します。同時に、医師、看護婦、医療従事者にも感謝します。彼らは、善きサマリヤ人を手本としています。全ての人は手本と同じにならなければなりません。キリストご自身が、病の床に伏

す人、苦しんでいる人一人ひとりの中におられるのです。いつの日か神があなた方皆にこうおっしゃることでしょう。「私の兄弟であるこれらの小さな人々の一人にしたことは、つまり私にしてくれたことである。」(一) これらの小さな人々の一人にしかかったことは、つまり私にしてくれたことだ。」(マテオ25・40、45)

このようにキリストは全ての国、全人類の間を通過して行かれます。脱出の書の中でモーゼは次のように祈りました。「主よ、私があなたのご好意を得ているのなら、どうぞわれわれの中においでになって、いっしょに進んでください。」(脱出の書34・9)

神は「われわれの中」を歩んでおられます。神は今日、ポーランドの首都ワルシャワの各地で荘厳に行われる伝統的な聖体行列とともに進まれます。「天の主が通られる。道を開けなさい。」神は町々を通られます。顕示台に安置された白いホスチアのもとにお通りになります。私たちの心と良心を通して歩まれます。私たちは、父と子と聖霊を一つにする絆によって結ばれた民となっているのでしょうか。私たちは本当に神の民となっているのでしょうか。愛する兄弟姉妹の皆さん、皆さんの苦しみによって神の民に欠けているものを補い、完成させてください。これが十字架にかけられ復活された方における皆さんの使命です。これこそ、皆さんが聖体の秘跡において果たすべき役割です。(91・6・14)

「教皇様の声」ヨ、ネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える『紙』毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
 郵便振替 神戸 3-72393